

いま一つのロマン派自然美学 Blake を他の詩人群と比較考量

(日本英文学会研究発表：2009年5月31日、東京大学駒場キャンパス) 森松 健介

現に Blake は自然を尊重して詩句・絵画に表現：(当日資料ではごく粗末な図版複製を呈示)

1 . I have no name

I am but two days old.—

What shall I call thee?

I happy am

Joy is my name,

Sweet joy befall thee! ('Infant Joy', 1-6)

2 . The sun descending in the west.

The evening star does shine.

The birds are silent in their nest,

And I must seek for mine,

The moon like a flower,

In heavens high bower;

With silent delight,

Sits and smiles on the night. ('Night' 1-8)

3 . Sweet dreams form a shade,

O'er my lovely infants head.

Sweet dreams of pleasant streams,

By happy silent moony beams. ('A Cradle Song', 1-4)

だが Blake は《反自然の詩人》とされている：

4 . Blake...objected to the deistic nature worship, with its idea that the world of three dimensions is all, and that it operates by mechanical causes and effects.(Damon:101) [これは正しい指摘]

5 . Blake is an artist in most respects as opposite as possible to Wordsworth. (Beach:112)

6 . David Riede: Blake "rejected nature utterly" (1987 ; Quoted: Hutchings38)

7 . Blake "despised" the material world regarding nature as "nothing more than the Mundane Shell or Vegetative Universe that was the vesture of Satan" (1995[みすず書房に邦訳あり]Peter Ackroyd 原著 257, 328) (Hutchings : 38)

8 . 洞察に満ちた Northrop Frye : *Fearful Symmetry* . だがその Blake の《自然》論は、真実の一面を衝いてはいるが反自然詩人ブレイク像を呈示した(やがてこれは定説となった)：

(a)ブレイクには・・・ライプニッツ的な、(自然界の中に)完成された秩序があるという考え はない。また自然の中に、外部的に現れた、神についての手がかり或いは兆し(hints or suggestions)を見出そうとする考えもない。(Frye:39. 括弧内の邦文は森松)

(b)(ブレイクにとって)自然は、神が別個に創造したものでなければ、私たち自身の客観的対応物でもない。ブレイクは、ワーズワスが、本来なら自分自身の精神の創作物とすべきものを自然の本然とした点で、また人間的秩序と自然の秩序の照応を信じている 点で、鋭くワーズワスを批判した。(同。括弧内は森松)

(c) (ブレイクの自然観からすれば、人間の立場から見た場合、人間の外部には尊重に値するものは 皆無だとして)自然は凄惨なばかりに残酷で、浪費的、無目的、混沌に満ちて半ば死んで いる。自然には知性もなく、親切気や愛、汚れのなさなど何も無い。(同。括弧内は森松 がフライを要約したもの)

Blake 自身にも《反自然》の発言が多い：

9 . Wordsworth の *Poems Referring to the Period of Childhood* に対する Annotation :

I see in Wordsworth the Natural Man rising up against the Spiritual Man Continually & then he is No

Poet but a Heathen Philosopher at Emmity against all true Poetry or Inspiration (E665) [EはErdmanの『Blake全詩全散文』の頁数。以下同断]

10 .Wordsworthの「虹の歌」: 'And I could wish my days to be / Bound each to each by natural piety' へのAnnotationで、Blakeは《自然への敬虔の念》の存在を否定: There is no such thing as Natural Piety Because the Natural Man is at Emmity with God. (E665)

11 . また *Jerusalem* の第3章に先立つ 'To the Deists' の冒頭:

He never can be a Friend to the Human Race who is the Preacher of Natural Morality or Natural Religion. (Pl.52: 1-2; E200) [Pl.はPlateの略で、作品が書かれた図版の番号]

12 . 11のような人物として科学者・啓蒙思想家を挙げる: [引用最後の行に注目されたい]

...the Spectre like a hoar frost & a Mildew rose over Albion [SpectreはAlbionの理性的部分]

Saying, I am God...I am your rational power!

Am I not Bacon & Newton & Locke who teach Humility to Man!

Who teach Doubt & Experiment & my two Wings Voltaire: Rousseau.

Where is that Friend of Sinners, that Rebel against my Laws!

Who teaches Belief to the Nations, & an unknown Eternal Life

Come hither into the Desart & turn these stones to bread.

Vain foolish Man! wilt thou believe without Experiment?"(*Jerusalem*, Pl.54 : 15-22)

《実験》と《証明》、それらによる数量的評価とその物質主義にBlakeは反対する。しかしWordsworthにも、Blake同様、自然科学の analytical な方法を非難する章句がある Viewing all objects unremittingly / In disconnection dead and spiritless...(*The Excursion*, , 961-64)

13 . [発表当日にはこれに詳しく触れる時間はないが] プリーストリ(Joseph Priestley, 1733-1804)はラヴォアジエ(Antoine Laurent Lavoisier, 1749-94)と並び称されてよい大化学者である。神学者としても、恐るべく浩瀚な書物に次ぐ書物の中で、奇跡や霊の蘇生などの神秘思想を批判しつつ、他方で敬虔なキリスト教徒として科学と宗教の矛盾なき合一を図った。このプリーストリとブレイクは、考え方においてまことに対照的である。クリーハン(Stewart Crehan)はこの対照を見事に要約している(Crehan:322)ので、ここにその一部を引用したい(以下Pはプリーストリ、Bはブレイク)。

P = 自然の法則は普遍的であり逃れがたい。B = 《自然》はより高位にある精神的リアリティの影だ。

P = 我々の諸観念全ての源泉は、外部の物質的世界である。 B = 「《内部的諸観念》は《全ての人》の中に在る。《諸観念》は真の意味で《彼自身》である」(「レノルズへの書き込み」)

P = このため「魂」ないしは精神もまた物質的であり、自然の必然性の法則に従う。B = このため魂ないしは精神は非物質的であり、なんらの自然の法則に従うことはない。

P = 人間の精神は、頭脳及び神経組織の働きとして、常に空間と時間に縛られる。肉体と同様、精神も有限である。 B = 人間の精神は、《詩的霊 Poetic Genius》として、空間と時間に縛られない。それは無限である。肉体のみが有限である。

P = 肉体が死ねば頭脳もまた死ぬ。死後の生はない。 B = 《死》は永遠の生への門口である。

P = 真の知識は実際的手段によって、すなわち物理的、化学的、生物学的、および社会的現象の研究によって、得られる。 B = 真の知識は内省によって得られる: 「あなた自身の《胸》の中に、あなたは自己の《天国》を持つ / そして《大地》及び眼に見える全ては、外部にあるように見えながら、内部に存在する」(*Jerusalem* 第三章)。

P = それゆえ知識は客観的・必然的基礎を有する。「事実と外見に何の顧慮も払わずに知覚力を判断するのは、想像力に何の抑制も加えずに、単に想像力のしたい放題に任せることだ。このようにして思想体系を打ち立てるその結果はあまりに明白」(『物質と精神に関する論考』=1777) B = それゆえ知識は自由な個々人の創造である。「私は《体系》を創造しなければならない。さもなくば他人の体系の奴隷となろう / 私は理を立てて比較しはしない。私の仕事は創造することだ」(*Jerusalem* 第一章)

P = 自由は、自然の諸法則 = 必然性についての正しい理解を通じて獲得される。 B=自由は、Bacon, Newton, Locke によって課せられた法則と必然性に対して想像力が勝利したときにこそ獲得される。

P = このため完全到達性(Perfectibility)は、絶え間なき進歩と改善を加えられた物質世界の中でこそ可能。 B=物質世界は墜落している。完全な状態は、この物質世界の滅却後に達成される精神的状態。

だが Blake には《親自然・親田園》の発言も多い：以下のほか、Hutchings 全編参照。

14 . 「私は《この世界》は《想像力》と《洞察映像(Vision)》の世界であることを知っています。私は絵に描くもの全てを《この世界の中に》見てとっています。ですが全ての人が同じように見るわけではありません。守銭奴の目にはギニ金貨がお日様よりも美しいのであり、《金銭》の用途を備えた財布のほうが、葡萄の房を満載した葡萄蔓より美的重要性(beautiful proportions)を有しています。ある種の人びとには喜びの涙を流すほどに感激させる樹木が、他の人びとの目には行く手を塞いで立つ《緑の物体》に過ぎません。ある類の人たちは《自然》を、全くの《嘲りの種》あるいは《醜悪そのもの》と見ていますが、私はこれらの人たちによって自分の価値判断(proportions)を規定しはいたしません。そしてある種の人たちはほとんどまるっきり《自然》を見はしないのです。しかし《想像力の人々の眼》には、《自然》は《想像力》そのものなのです。その人の在りようそのままに、人はものを見るのです。」 (Letter to Dr Truster, August 23, 1799. E702.)

15 . 次の'You'は、語り手口スの敵。Blake も Wordsworth 同様 'murder by analysing' を排斥。

You accumulate particulars, & murder by analysing, that you

May take the aggregate; & you call the aggregate Moral Law. (*Jerusalem* Pl.91:26-27)

16 . 次の'they'は、the sons of Urizen. 田園的労働(農民や牧人の workmanship) への尊重の念が見える。

And all the arts of life they changed into the arts of death in Albion.

The hour-glass contemned because its simple workmanship

Was like the workmanship of the ploughman, & the water-wheel

That raises water into cisterns, broken & burned with fire

Because its workmanship was like the workmanship of the shepherd. (*Jerusalem* Pl.65:16-20)

17 . [自然物が人間に見える]..before my way

A frowning Thistle implores my stay.

What to others a trifle appears

Fills me full of smiles or tears;

For double the vision my Eyes do see,

And a double vision is always with me.

With my inward Eye 'tis an old Man grey;

With my outward, a Thistle across my way.(23-30) [次はこの詩の終結部, (83-8)]

Now I a fourfold vision see

And a fourfold vision is given me;

'Tis fourfold in my supreme delight

And threefold in soft Beulah's night

And twofold Always. May God us keep

From Single vision & Newton's sleep. (Letter to Thomas Butts, 22 Nov.1799. Keynes:60)

18 . Where man is not nature is barren(*The Marriage of Heaven and Hell*,Pl.10:68, E38)

： *Jerusalem* における Vala 像の分析 それによる Blake 自然観の全体像 示唆。

それに先立ち発表者が *Jerusalem* の内容をどう理解しているか、簡単に記す：*Jerusalem* の、活躍しない主 Albion は仮死状態で眠っている。彼の幽鬼的な力(Spectrous Power)である《理性》が、二つの岩となってしまった彼の《崇高》と《パトス》を隠蔽している。Albion は全ブリトン人とその歴史を象っている人物だが、場所でもあり、人びとの心情でもある。彼から別れ出た《流

出》が Jerusalem と Vala である。女性 Jerusalem は都市でもあるが、Albion の優しき感性、良き想像力という部分であり、彼女が流出したことによって Albion はこれらの性質を失っている。女性 Vala は、科学の理解による《自然》を象っていて、Jerusalem に嫉妬し、Jerusalem に替わって Albion を乗っ取ろうとする。(発表者の理解では)これは当時の英国が良き感性を失い、数量(次の引用の「証明」)的にのみ善悪得失を考える傾向に乗っ取られそうになることを表している。この状態から生じる各種の悪を封じ込めようとするのが真の主人公ロス(Los)である。Los は、Albion の息子たち・娘たち(イギリス人たち)の悪しき活動を制止しようとするが、成果はなかなか得られない(Los は墮落した現実を永遠界=Eternity の状況に復元し、芸術と良き生産の都 Golgonooza を建設しようとするのである)。墮落状態にある Albion の主張は「人は《証明》(demonstration)によってのみ生きるのであって信仰(faith)によってではない / 私の山々は私のものだ、私はそれらを独り占めにする」(Pl.4 : 28-29) これとは正反対の考え方が Los の信念。Los の努力が実らないかと思われた終盤、詩的立場からの解釈によって通常のキリスト教解釈が発展解消される 'I know of no other Christianity and of no other Gospel than the liberty both of body & mind to exercise the divine arts of Imagination'(E231)。図版 91 では There is no other / God, than that God who is the intellectual fountain of humanity(9-10)と言ひ、既成キリスト教儀式類を否定(12-14)し、Los が例の Spectre と戦う(32-46)。ついに Albion は目覚め(Pl.95 : 3)、England, who is Britannia, entered Albion's bosom rejoicing.(Pl.96 : 1-2)とされ、Vala は Jerusalem と合体し、図版第 99 は、「樹木、金属、土そして石ころをさえ含めて、全ての人間的なものがその個としての姿を認められた(All human forms identified)」(Pl.99:1)と語っている。

19 . To build
Babylon the City of Vala, the Goddess Virgin-Mother.

She is our Mother! Nature ! (Jerusalem Pl.18: 28-30)

20 . Vala the shadow of Jerusalem, the ever-mourning shade.(Jerusalem Pl.12 : 19)

Vala は Jerusalem と対にされ、Jerusalem の《影=Shadow》ないしは反対概念。Blake においては反対概念どうし(contraries)はやがて弁証法的に止揚され、より高度な概念に発展しうる。21 に見るとおり Vala と Jerusalem は元は同一の Brittannia の、二つに分裂した片割れ同士として描かれているのである。

21 . Albion groans, he sees the Elements divide before his face.

And England who is Brittannia divided into Jerusalem & Vala . (Jerusalem Pl.32: 27-8)

22 . ..Vala would never have sought & loved Albion

If she had not sought to destroy Jerusalem.(Jerusalem Pl.17: 24-5) 物語の次元を越えれば、この寓意は、物質主義が、想像力と創造性を滅ぼすために、Albion を横取りしようとすることである。

23 . 以下 Jerusalem 理解如何を拙訳で示す。原文は当日別紙。「アルビオンの娘たち」は Vala の別の姿。

アルビオンの娘たちは知らないのだ、なぜ愛するのか、何ゆえ病み、死ぬるのかを。

嫉み、復讐、残酷でしかないものを《聖なる愛》と称するからには。

この考えが星々を山々から隔て、山々を人びとから隔て、その結果

人間を小さな地を這う根っことし、自分の外部に放置したのだ。(Jerusalem Pl.17: 29-33)

24 . Vala と同じ世界観を持つ《Albion の息子たち》が、Jerusalem を捨てよと Albion に呼びかけて

もはや罪深い喜びは無用の長物、

老年と若さの喜び、少年と少女の、動物と草花の喜び、

河川と山の、都会と村落の、家庭と家族の喜び、

榿の木、棕櫚の木の下の喜び、葡萄蔓と無花果の下の喜びなんて。

自分を否定して、などと！ 実際には父と息子のあいだの、

光と愛のあいだの、戦争なのだ！(Jerusalem Pl.18:16-20)

ここでも悪役によって、動物と草花、河川と山、榿の木と棕櫚の木、葡萄蔓と無花果が否定されている。肯定されるのは「自分」であり、後続の「戦争」礼賛によって、「自分」とは《我欲》の意だと見てよいであろう。『リア王』のエドマンドの台詞の影響(すなわち新世代である《Albion の息子たち》が「罪深い」としている従来への非難の中に、『リア王』に見られると同種

の価値の逆転が生じている)が明らかであり、自然物と連想されるもの全てが否定され、欲と欲の闘争のみが肯定される(父と子の《闘争》の正当化もエドマンズの継承)。ここで彼らは、19 に引用した「Vala の都市バビロンを…」の台詞を語り、Vala を《自然の女神》と呼ぶ。ここにもエドマンズの《自然》が顔を覗かせる。弱肉強食の自然観であり、これは明らかにロスの、そして Blake の自然観と対立する。そして自然物に歓びを見出す人びと、つまり「音楽家や美術家、詩人たちを鉄の法則に縛りつけようという彼らの意図は、芸術にとっても国家にとっても破滅をもたらすものだ」(Witke:45)というこの場面へのコメントは、Blake の意図をよく代弁しているし、二一世紀にも通用する警告である。

25 . 暗く得体の知れない夜、限界さえなく、測り知ることもできず終わりもない夜、
抽象的な哲学が想像力に敵対して戦いを挑んでいる世の中だ、
(想像力こそは、永遠に祝福される主イエスの神的ボディ)。
この夜の山の上で、エルサレムはヴェイラとともにさまよう、
あれら《車輪》たちの回転に引きつけられたあげく。(Jerusalem Pl.5:57-61)

26 . Jerusalem と Vala は Albion が倒れているのを見る。すると「Vala は、涙のヴェイルを織った」(Jerusalem Pl.20:3) 彼女のヴェイルは常に本性を隠蔽するために織られる空涙 彼女はエルサレムの哀しみの声を泣きながら聞かすが、それは「自分のヴェイルに隠れて」(同:11)である。この間 Jerusalem は、Albion の状況を悲しみながら彼を非難。彼が彼女を「人間生活の冬に閉じこめ」(同:5)たからだ。

なぜ若さと処女と言うべき無垢の領域を閉ざしてしまったのですか、
そこでは過ちを忘れ、悪については考えもせずに生きますのに、
わたしの子羊やわたしの小川のあいだで、わたしの囀る鳥のあいだで。(同:6-8)

エデン園の状況を語ってはいるが、ここでも子羊、小川、囀る鳥は良きものの代表格として言及されている。

27 23 図では、Albion が「私の魂は Vala のヴェイルの中に織り込まれて、溶けてしまった」(4)と嘆いている。Jerusalem、すなわちイギリス社会の精神的文化全体が、その心根において、唯物論的自然観と、その応用とされる政治体制に毒されているという寓意が Vala の場面に表されている。

28 . Albion は《神の子羊》(Jerusalem Pl.24:59) = 想像力(イエス)を殺害して、Vala が象徴する自然観を受け容れ(Witke : 56)てしまった。だから

…私は何ということをしたのか？ おお、全ての力を持つ《人間の言葉》よ、
君たちは自分の子たちの中で殺された《子羊》の血潮の中から私に跳ね返る。(中略)
太陽はブリトンの頭部から、月はその腰部から逃げ去った。(Jerusalem Pl.24:1-2; 10)

ここでも太陽と月、いわば想像力の源である自然物が失せたとされている(この図版の上方には波に弄ばれる船としての三日月が描かれ、右手中央には臀部の大きな Vala)。またこの荒野もかつては

…私の連丘の上にたなびく雲のように、お前は愛らしかった、
若さと愛の時代には エルサレムがお前の心から求める願いであったときには。(中略)
《神の子羊》の足取りがそこに聞こえたときには。(Jerusalem Pl.24:36-7; 49)

すなわち想像力が、自然界を美しいものとして見、かつ表現していた時代が懐かしまれる。

29 . 第 25 図版。その絵画では、Vala が創世の神のかたちで Albion の頭の上に立つ。Vala の分身 Rahab と Tirzah が、Albion の臍の緒を引き抜く(Witke:57)。「Albion という織物をほどく」(Paley 83:99)のである いや《創世の神》との整合性から、織物をほどいて新たな Albion を創る(今泉:178)と見るほうが正しいかも知れない。織物ほどきであれ創造であれ、Albion が Vala の支配下に置かれる寓意は変わらない。彼の軀にはまだ太陽、月、オリオンの帯、星々などが描かれており、やがて「星々が満ちた天空は皆、Albion の力ある手足から逃げ去る(去った)」(Jerusalem Pl.30:20-1;70:32)となる前段階を示している。第 45 図版で Jerusalem が語るように「Albion よ、わたしはもはやあなたの妻ではあり得ません」という事態となり、Vala が「Albion はわたしのものよ」(Pl.45:44; 50)とこの支配を明言する。

30 . 第 27 図版では詩の冒頭に、原初においては Jerusalem が自然界を統御していたと歌われる (詩は左右に分けてある)

Her(Jerusalem's) Little-ones ran on the fields

The fields of Cows by Willans farm:

The Lamb of God among them seen

And fair Jerusalem his Bride:

Among the little meadows green. (5-8)

だがやがて、この Albion の原初の状況が、戦乱によって激変したことが歌われるのである。

Albion s Spectre from his Loins

Tore forth in all the pomp of War!

Satan his name(37-39)

Shine in Jerusalems pleasant sight. //

She walks upon our meadows green:

The Lamb of God walks by her side.(15-18)

Jerusalem fell from Lambeth's Vale

Down thro Poplar & Old Bow;

...In War & howlind death & woe.(41-42, 44)

この歌は Jerusalem という作品が、時代の混乱を映し、それに挑戦する叙事詩であることを見事に示す。

31．第 30 図版。Vala の誘惑に陥った Albion は答える

あの太陽は君の夫ではないのか？ あの月は、君の輝くヴェイルではないのか？

天の星々は、君の子たちではないのか？ 君はバビロンではないのか？

君は全てのものの母《自然》なのか？ エルサレムは君の娘なのか？ (Jerusalem Pl.30:7-9)

地上では今、戦争の道具どもが鑄造されている、国々の民を蹂躞する鋤もまた。

それらは天を閉ざす鉄の矢来のように、私を取り巻き苦しめている。おゝヴェイラよ、

(中略)大西洋の高い断崖・このアルピオンは不毛の地になってしまった。(同:13-6)

《自然》が神格化され、自然の法則のみが崇拜され、その原理を利用した武器が作られる《現代》を嘆く。

32．自然の法則を何より尊ぶ Spectre が Albion の前に立って言う 12 に掲げた英文を拙訳で再掲：

私が神だぞ、おゝ人間の息子たちよ！ 私はお前たちの理性の力だ！

私こそが、人に謙虚さを教え、懐疑と実験とを教えるベイコン、ニュートン、

そしてロックではないか？ そして私の二枚の翼はヴォルテールとルソーではないか？

私の法則に反抗して、国々の民に信仰を教え、誰にも判らない永遠の生命を

教えこもうとする、あの、罪人たちの味方はどこにいるのだ？

彼こそ砂漠にやってきて、ここにある石ころたちをパンに変えるがよい！

うぬぼれた愚かな奴めが！ お前は実験もしないで信じるつもりか？ (Pl.54: 16-22)

33．The Divine Vision が Jerusalem に対して語る 自由と生命を与えたのにお前はバビロン如きを建設する、

だからお前の山々は不毛になっているのだ、エルサレムよ、

お前の谷々は燃える砂漠に、河川は死の水になっているのだ、

お前の村々は飢饉で死に、都市たちは家から家へとパンを求め、

物乞いして歩くのだ。(Pl.60:25-8) そしてこれを知って喜ぶのが Vala である

ヴェイラは一夜じゅうこれを聞く、そしてエルサレムが絶望の苦しい殴打で

自分の目鼻を醜く傷つけるのを見ると、自らの神聖さを誇ってヴェイラは

勝ち誇る。この間、《サタンの神聖》が彼女のなかで勝ち誇ったからだ。(同: 45-7)

34 第 62 図版では《自然》の扱いにおける転機が訪れる。Jerusalem は'I am left to the trampling foot & the spurning heel!'(Pl.62:

3)と言いつつさまよっている これは想像力によって捉えられていた美しい自然が、一八世紀の自然解釈によって、機械的に理解

された状況を指す。言い換えれば「自然主義者が彼女を追い出して代わりに Vala を据えた」(Witke:155)状況。想像力としてのイ

エスは言う

ヴェイラは(再)創造されねば。私は彼女を朽ち果てる墓に放置できないからです

私は追放されていた者たちが帰ってくる道を用意します、

さあ私と一緒に村々へ来なさい、あらゆる都市の中を歩み通りなさい。[Pl.62:20-3、(再)は森松] ロスはこの《神の御影》を見て、希望を抱き、仕事を再開する(同:35-42)。

35．第 65 図版でも Vala は Albion の Spectre たちと合体したまま。両者はルーヴァの死を票決する(Pl.65:8)。これはフランスに

対する戦争を意味するとされる(Stevenson:764)。実際両者は、ユリゼンの息子たち(権力者とその追隨者たち)に鋤と馬鋏、織機と

槌、鑿、定規とコンパス、すなわち生産手段の全てを預けてしまい(Pl.65:12-3)、剣、戦車、武器としての斧、進軍ラッパ、戦時用の横笛を生産させる(同:14-5)。これを総括するのが次の詩行である(16 に掲げた英文の拙訳による再掲)

…生活の全ての技芸を、両者はアルピオンにおける死の技芸に変えた、
砂時計は侮蔑された、なぜならその簡素な仕組みが
耕す人の働きぶりに似ていたからだ、また水槽に水をくみ上げる
水車は、壊されて火で焼き滅ぼされた、なぜならその仕組みが
羊飼いの働きぶりに似ていたからだ。そしてそれらの代わりに
込み入った歯車どもが発明された、車輪の外に車輪を合わせて。(Pl.65:16-21)

Albion(英国)の若者たちは、こうした機械に縛られて激しい労働に明け暮れる。

その用途さえ知らされずに、僅かばかりのパンを買う銭を得るために、
本来は知恵に満ちた日々を、悲しい苦役に費やすのだ、
小さな物事を見て、それを全体と考えるようにされて。(同:25-7)

民衆は日々の生活に追われて武器生産にも易々として従う。民衆を犠牲にした科学の発展とその武器への応用がここに語られている。これは見事な反戦詩というほかはない。反戦詩は為政者にはすぐにそれと見抜けない装置が必要だが、Blake の難解さはそうした装置が施されているからでもある。

36 . そしてこれは皆、Vala の仕業だとされる

今こそ戦闘はお前の優しげな手足のまわりで荒れ狂うのだ、ヴェイラよ！
お前、苦しげな涙を浮かべているが、ほくそ笑むがよい、お前の美の全てを示すがよい、
だって剣の傷を甘美と見ているじゃないか、骨折を喜んでいるじゃないか？
戦傷者が戦場で呻いている今、お前は大鎌どものあいだで微笑むつもりか？
我々はロンドンから何千人となく、またウェストミンスターとメアリボンからは
何万人となく、船また船に閉じこめられて連れ去られたのだ、
手と足を鎖で繋がれ、我々の隊長の鉄の鞭のもとで戦うことを強いられて、
敵よりも自分の上官を、さらに恐れながら。ヴェイラよ、青い眼を上げて見よ、
お前のサファイアの靴を履け(Pl.65:29-37)。 内容は明らかに戦時体制批判である。

37 . 《Albion の息子》たちはソールズベリ平原に巨大な建造物を造営する。

この建物は《自然宗教》だ、その祭壇は《自然道徳》だ、
永遠の死のための建物だ…(中略)

ここにヴェイラは立ち、鉄でできた破壊の紡錘を回す、
彼女をかばう二柱のケルブは、のちに Voltaire と Rousseau と名づけられ…(中略)

Bacon & Newton & Locke の女性的幕屋としての凍った息子たちだ。(Pl.66:8-10;12;14) Voltaire 以下五人の名前は、確かに自然を崇拝する人物の代表として扱われている。《自然の女神》は今や、自然科学の真理を受け容れたり、さらに進んで自然状態を人間社会の理想とする人びとの神となったとされる(Voltaire と《自然宗教》批判は第 73 図版でも繰り返される=Pl.73:29-31)。

38 . 失われた永遠界の姿。ハンドは Albion の 12 人の息子の長兄。永遠界では自然物と調和していた。

全てがハンドの友だった…(中略)

なぜなら永遠界では全てが人間なのだ。川たち、山々、都会たち、村々、
これら全てが人間。あなたがこれらのものの胸に入れば、あなたは
天界と地上を歩くのだ、あなたの胸にあなたは天界と地上を抱いているからだ、
あなたの見る全ては、外にあるように見えながら実は内にある、つまり
あなたの想像力の中にある、この死の世界は想像力の影に過ぎない。(Pl.71:14-9)

Blake では都会が《自然》の対立物とされることは少ない。都会を貶めた詩人としての Blake 像は「読み違え」(Michael:16)と

さえ言われる。上に見る永遠界では、人は《自然》と《人為》の友として共存。

39．最終第四章の冒頭第 77 図版の散文「キリスト教徒へ」は、Blake の芸術観を見る上で重要。先に挙げた'I know of no other Christianity and of no other Gospel than the liberty both of body & mind to exercise the divine arts of Imagination'(E231)の引用参照。また「人間の生は、芸術と学問以外の何であろうか？(中略)芸術と学問への労働、これだけが福音の労働である(中略)知識について労働することは Jerusalem を建設することだ。知識を軽蔑することは Jerusalem を軽蔑することだ」(E232.)とも語る。

40．散文部分が終わると、詩の語り手は《火の車輪》が「創造物の流れに逆らって / 全てのものをむさぼり食い」つつやってくるのを、また太陽と月は単なる球体に、人間も小さな根っこにされるのを見る」(想像力によるこれらの存在の美を否定して、それらが唯物的に理解されていることを指すと思われる)。その火の名前を見張り人に尋ねると「これは宗教の車輪だ」(Pl.77:13)という答が返ってくる。驚いた語り手が「これがイエスの法ですか？」(同:14)と問えば「イエスはこの車輪の流れに逆らったから / 死んだのだよ。この車輪の名はカヤパだ、 / 暗い、《死の説教者》だ、罪と / 悲しみと、処罰の説教者だ。 / 《自然》に敵対する説教者だ！これが《自然宗教》だ。 / しかしイエスは輝かしい《生の説教者》だぞ、 / 自己否定と《罪》への許しによって / この火の《法》から《自然》を創造した《生の説教者》だ」(同:16-23)ここでは《自然》の概念が対立する二つの意味に用いられている。まず《自然宗教》においては、《自然》は厳格な(人間の本性に反する機械的な)法則の集合体とされている。イエスの処刑に関わったカヤパのような、俗世の権力者が揮う法律がこれと同一視されている。一方カヤパのような輩が敵対する《自然》とは、人間の本性を含む自然的生命を指すことになる。イエスの《罪への許し》は、後者の《自然》を容認した、当時の実定法に反した倫理観を指す。ここから《車輪》、すなわち当時の律法への反逆が生じ、これを全うするには《自己否定》によって犠牲とならざるを得なかったという意味である。ここにブレイクの反体制的自然観が現れている。この図版の韻文は「(ロンドンの塔たちは)《神の子羊》を、 / イングランドの緑と喜びの木蔭に迎え入れる」(Stevenson:91-2; E233; K718)で終わる。《想像力》イエスは、やがてイングランドの自然的環境に歓迎されることが示唆される。

41．Vala は父にして恋人である Luvah から Albion 殺害の命を受け、

ルーヴァの娘である私ヴェイラは、道徳法の中にアルビオンの遺体を保存します、

愛らしくて嫉み深い、失神を招く甘い香りの香油を防腐のために詰めて、

アルビオンが蘇生してルーヴァを殺害せぬよう、私の胸の中に保存します。(Pl.80:27-9)

ブレイクの巨人たちは死んだとされても、それは仮死状態になることであって、保存されたという場合にはなお蘇生の可能性を残すことになる。上の引用は残酷に見えながら、この可能性を示唆している。ブルームもこの台詞を「エルサレムの嘆きに劣らず、必死の思いの嘆きである」(Bloom:465)として、ヴェイラの中の一種の優しさを認めるのである。

42．大団円に近づくにつれて、Los の気遣いは自分の女性流出や、Albion の娘たちにも及んでゆく。批評界一般では、Blake は女性に対する偏見を抱いた詩人で、*Jerusalem* 第 17 図版の Vala による Albion 誘惑場面や、その結果としての 21 図版冒頭などを論拠に、有害な女性とそれによる Los と Albion の苦境が論じられる。しかし Blake が叙事詩執筆に際して大きな影響を受けた (Wittreich1975 : 230) William Hayley の著 *An Essay on Epic Poetry*(1782)が指南する叙事詩のあるべき姿の第一項目は、「人間の心を把握せよ。そして女性を叙事詩の主役に抜擢せよ」であった。作品 *Milton* において Blake はこの指南に従っており、*Jerusalem* にもそれが見られるように思われる。

おお見捨てられた土地よ、

サリーとサセックスはエニサーモンの部屋としよう、

そしてそこに私は彼女の休息のベッドを作ってあげよう、

そして私の柱を美しい迷路となるように 彼女を囲ませよう。(Milton Pl.83:25-7) イギリスの《迷路》は、密に植えられた樹木によって作られるのである。自国アルビオンの回復のために、国の緑化が考えられている。またアルビオンの娘たちの一人キャンベルの名を挙げて、娘たち全体にも、自由意志のもとに国土を作りなすようにさせてやりたいと述べる

キャンベルとその姉妹たちを、《世界の外構》の中に坐らせよう、

彼女らの意志に従って、いかようにも変化する地球を形成させよう、

…(中略)愛らしいアルビオンの娘たちのころざしに従って
時として地球は深淵の中で回転するだろうし、また時には
中心に立つだろう、時には平らに広々と延びるだろう。(Pl.83:33-4; 40-2) この《世界の外構》はロスの創作物なのである。地球の表面を意味すると思われるこの《外構》を、これまでロスの意志に反して動いてきたアルビオンの娘たちに美しく彩らせようとする。それというのも

この国土は荒廃を特徴としているからだ、だから私たちが
都市群や村々の種を、人間の胸に播くのでなければ
アルビオンは血みどろの岩となるに違いない

…(中略)アルビオンの覚醒までは混乱のうちに横たわるだろう、

…(中略)愛らしいエルサレムが再び永遠界に流出するまでは。(Pl.83:54-6; 58; 60) こういって Los は努力し続け、やがて Albion の娘たちが「私たちの父 Albion の国土よ！ おお、美しい国土だったのに」と語るのをロスは聞く(同:84)。43 . 第 85 図版の Los :「谷たちは静かに耳を傾け / 星々は聞こうとしてじっと留まる。エルサレムとヴェイラは嘆くのを止める」(Pl.85:14-5) この二人に聞いてもらおうと Los は歌を歌う

アルビオンの丘たち、谷たちの上に
都市群はまだ時間と空間の中に具現してはいない、播き給え
多くの種を、おお姉妹たちよ、時間と空間の子宮の深みに、
エルサレムのために芽を出すように。…(中略)

おお、バビロンとともに住んでいるお前、愛らしいお前、出ておいで(Pl.85:27-30;32)

この呼びかけに応じて女性エルサレムが姿を現す。
愛らしく優しげなエルサレムよ、私にはあなたの姿が見えるぞ、愛らしい人よ！

…(中略)聖なるものにおける純粹そのもの！

…(中略)最愛の国土アルビオンよ、私にはあなたの山々、丘たちが見える、

谷たちそしてあなたの楽しい都市群も。(Pl.86:1; 7; 11-2) またロスの腰部から流出した Enitharmon も美しい女性として彼の前に現れ、二人は手をつないで歩く(同:50-63)。しかし別々の人格となった二人は、やがて第八七、八図版では対立する(Pl.87:20-88:37)。これは女性のかたくな意志の描写というよりは、女性の個としての独立と、男の相反物(Contrary)となることによって人間界の完成のために相補する要素となった女性を描いているのではないか？ 個としての独立については「女性的なものが男性的なものから分離し、双方が人から別れ / 人の流出であることを止めて、生を自らのものとして受け取った」(Pl.90:1-2)の台詞があり、相補する要素については「永遠界で人が人と語らうときには、彼らは / 互いに相手の胸にはいるのだ(二つの胸こそ喜びの宇宙だ)[中略] / 人が人と一体となるには自分の流出たちに依るしかないからだ / 二人は男と女の両方として、おのおのの人間性の門口に立つのだ」(Pl. 88:3; 10-1)の台詞がある。これも《人間本来の自然》を描く台詞と思われる。また 90 図版では Vala の捧げ持つカップが Jerusalem の手に渡る(同:56)。女性の悪しき面の描写が、この部分には多いとしても、今や Vala が、そのカップによって象徴されていた《悪しき面》を放棄したのだ。

44 . 《幽鬼》との闘いにおけるロスの言葉：

私は慈愛と美德で行動する、だから何度も何度も殺害されるのだ！
君(=幽鬼)は個別のものたちを一つに集め、それらを総体として扱うために
分析することによって殺す(murder by analysing)、君はその総体を《道徳的法規》と呼び、
集めてむくんだものを、取るに足りない個別のものと呼ぶ。
けれども総体をなす事物は、その個別のものたちにおいてこそ生命力を持つのだ、
そして一個一個の個別のものが人、つまり神なるイエスの神なる一員！(Pl. 91:25-30)

世界の唯物的解釈は自然界・人間界を総体として捉え、個を尊重しなくなることをロスは見抜いて抗議している。私たちは「分析することによって殺す」という Wordsworth の言葉がここに出ることに驚くが、全体よりも個、一個の人間を尊重するという考え方において、Blake は実際 Wordsworth に近い。

45 . それからロスが《幽鬼》を送り出した。《幽鬼》のピラミッド全ては、砂の粒子に見えた。彼の記念塔は羽虫の羽根の塵と化し、彼の星満ちる天空は彼が必死に捉えようとするのを嘲る蛾の、金粉・銀粉に変わった。(Pl. 91::47-9)

ロスとは異なる自然観・価値観で捉えられた世界が、ロスのそれに置き換えられたのである。人為による豪華な品々が無価値であること、物質として理解された自然の様相もまた意味を持たないことがここに主張される。天文学さえ、想像力をもって見た空の美しさには劣るとされる。

46 . 第 95 図版では Albion 自身が蘇生する(2-3) 「機械化された自然界が黙示録的に変貌」するのである(Hutchings, 同)。すなわち、想像力によって無機質なものが人間的に意味あるものになる場面である。人間の想像力によって人格化・神格化された《自然》は、尊ぶべきものとされて、「自然界への単なる功利主義的接近を阻止する…自然物たちが非人間化される時にこそ、それらは搾取の対象資源ないしは《原料》とされるのだ」(Hutchings, 207-08)のである。

46 . And England, who is Britannia, awoke from death on Albions bosm(Pl.94: 20) これは And England, who is Britannia, divided into Jerusalem & Vala (Pl.32:28) と書かれていた状況が、いわば可逆反応を起こした状態。すなわち Jerusalem と Vala は合体したのだ。だから「ブレイクの黙示録においては、アルビオンとその構成要素である四人のゾアたちによって表される人類と、(終幕場面に描かれる)太陽、月、雲、風によって表される《自然》とは、理性による自然科学を破壊しはしない。むしろ自然科学を、ブレイクのいうドルイディズム的な奴隷状態から解放して、人類と自然は、自然科学がかつて分離されてしまった詩的芸術と最終的に再結合するのに必要な諸条件を創造する。」(Hutchings, 210[Pap.211-12], 丸括弧内森松) この解釈を私たちも受け容れることができる。自然科学 Vala と自然への詩的感応 Jerusalem は合体したのだ。

47 . 最終 100 図版は絵画のみの一葉であるが、中央の Los は右手の槌のほかに、左手に巨大なやつとこを持っている。これがニュートンのコンパスに酷似する。すなわちニュートン的な科学も Los は包摂する寓意を籠めた表現かも知れない。また向かって左の《Los の幽鬼》は、眼と耳の正常な働きを得て、太陽を巡らせに飛び立つ。この男性二人には、それぞれの発展があるのである。そして右手の女性は Los の妻 Enitharmon とされるが、その右手から垂れる繊維は第 25 図版における Vala の繊維に酷似し、三日月から墜ちてくる幕は、第 32 図版の Vala のヴェイルによく似ている。Vala が合体したのは Jerusalem とではあるが、Enitharmon の姿を用いて、Vala の機能が Los たちの共同作業の中に吸収されたことを示すのかも知れない。そういえば Enitharmon のまわりには、三日月だけではなく星々もちりばめられ、第 25 図版で瀕死の Albion の両脚にあったときよりも輝きを増しているのである。全てを慈愛と許しを標榜するこの作品の終幕で、こうして Blake は、自然界の解釈にも弁証法を用いて、Vala と Jerusalem という相反物から、新たな認識へと向かおうとしているのではないだろうか? 「Blake の黙示録においては、Albion とその構成要素である四人の Zoas たちによって表される人類と、(終幕場面に描かれる)太陽、月、雲、風によって表される《自然》とは、理性による自然科学を破壊しはしない。むしろ自然科学を、Blake のいうドルイディズム的な奴隷状態から解放して、人類と自然は、自然科学がかつて袂を分かった詩的芸術と最終的に再結合するのに必要な諸条件を創造する。」(Hutchings : 210) この解釈を私たちも受け容れることができるであろう。「ベイコン、ニュートン、ロックが、そしてミルトン、シェイクスピア、チョーサーが / 血のように赤い厳しさをもった一つの太陽となって、荘厳なかたちで、天を全ての側面から / 取り囲んだ」(Pl.98:9-11) すなわち、Vala が Jerusalem と合体したと同じように、ニュートンたちもまたシェイクスピアたちと《一つの太陽》を形成して世界を囲み込む大団円である。

48 . As Blake had done, Shelley unifies the contexts aesthetic, religious, philosophical, and political. (Hoagwood : 10)

49 . *Milton* では、ミルトンの寝床にオロロンが達すると、ロスとエニサーモンから《永遠》にまで広い道が通じる (*Milton*Pl.35 : 29-36)。人の都ゴルゴヌーザが《永遠》と繋がったのだ 「いずれの一日にもサタンが見いだせない一瞬がある / 彼の見張りの鬼も見いだせない一瞬が」(42-3)。この一瞬にオロロンはロスとエニサーモンの許に達した(45)。このように「動脈の動悸以下の短時間」にも、至福を感じさせる瞬間がある。その瞬間の朝の花のかぐわしさ、流れの美しいことが描かれる(M35 : 48-53)。香りは開けた道を通して永遠界から漂うものとも読める(Otto : 92)。オロロンは《かぐわしさの岩》に腰掛けてミルトンを待つ(M35 : 60)。この岩には泉があり、二つの流れに別れる。一方はゴルゴヌーザを通り、エデンに達

する。他方は虚空と全ての教会を経たのち、ゴルゴヌーザで合流する(M35: 49-53)。キーツの『エンディミオン』の流れの描写の先触れのような、人物の心を川で表した風景である。教会の援護を受けずに永遠界に達する理想と、教会を経てそこに到る一般の人びととともにエデンは受け容れるのだ。野生のタイム草と雲雀が、ロスの使者として登場する(M35: 54; 63)。

50. 当日はほかによく知られた Blake の短詩数編について触れる。また当日時間が許せば Blake の時空論を追加。

主な作家・詩人の自然観と、Blake への関わり ロマン派、ヴィクトリア朝詩人については省略。

Edmund Spenser (c.1552-99) Pastoral の扱いにおいて、牧人や田園の描写に多重的な寓意を籠める方法を用いた。Blake は Pastoral の伝統、とりわけ寓意を多層的に盛り込む点で Spenser に酷似。Blake 初期の一見素朴な歌草に見える短詩においても、Pastoral 的な多層的寓意が用いられている。また Faerie Queene に付せられた Mutabilitie Cantoes の、《自然》の復元テーマも *Jerusalem* に似る。

William Shakespeare 1. *King Lear* においては、新旧の世界観・自然観の衝突を悲劇の dynamics の源泉としている。Blake の *Jerusalem* もまた対立する世界観・自然観の衝突を描ききっている。また前者の、仮面をかぶった人物(Kent など)、Fool、狂者、錯乱状態の人物など、平常ではない characters が発する言葉のなかに真実を語らせてゆく手法(すなわち *King Lear* 自体のなかにある、Pastoral の《真説隠蔽機構》と呼ぶべき手法)も、Blake の前後期を通じての、いわゆる《予言書》類に用いられる。また astonishment を多用して、それに撃たれた人物が新たな認識に至るといふ、sublime 手法(De Luca 参照)の点でも、Blake の《予言書》は *King Lear* と似ている。たとえば Blake の、次の 2 行では“Sublime astonishment”が高貴な人間的感情を産むことが語られている)

Then Los said: 'I behold the Divine Vision through the broken Gates

Of thy poor broken heart' astonished, melted into Compassion & Love(*The Four Zoas* Pl.99. : 15-6)

2. *The Winter's Tale*, *The Tempest* においては、Nature と Art との多様な意味合いが、幼年・若年、牧人・田園・孤島、処女性、術策の欠如、など Nature の美点、成年・老年、宮廷・文明、百戦錬磨、教育教養、芸術など Art の美点と対置される。Nature と Art それぞれの欠点(無教養、暴力、嫉妬、単純、無法策と奸計・欺瞞、野心、法の苛酷、分析解剖)もまた同様に対置される。Blake では Innocence と Experience という、言葉こそ違え、実質的に Nature と Art と言い換えてもよいほどの対置が、初期の作品には明白に、また《予言書》類にも隠然と、用いられている。両作家ともに、エデン園や黄金時代、人間の Fall、Prelapsarian と Postlapsarian の Nature という発想源を、ふんだんに利用している。

John Donne (1572-1631) 新科学の知識をどの程度に受け容れるか、自己の詩的世界とそれをどのように調和させるかを悩んだ、おそらく最初の詩人である。初めは面白おかしく新科学のイメージを用いていた。'The Good-Morrow'では、外部世界の拡大と動乱には、我々は動じないぞ、だって我々にはこの小さな部屋が全世界なのだからと言う程度に科学を鼻であしらったが、次第に詩の真実に背馳するものとして科学は遠ざけられ、『一周忌の歌』(*The First Anniversary*, 1611)では、他者との相互関係を無視した世界観 悪しき個人主義の主張のみが闊歩する、天と地の感応関係の、次のような消失の中に、ダン は世界の衰退を見る

世界のこのような衰退は、如何なることにもまして

天が地上への影響力を 差し控えてしまったことや

四大元素がこの影響力を感じなくなったことの中に、

また父なる天も、母なる地も不毛と化したことの中に見てとれる。(377-80)

《衰退》という言葉の中にダン は、従来の嬉しい幻想を失った新時代の精神不安定を表している。後年にはさらに宗教的な色彩の濃い詩風に移行する。科学への態度・世相批判が Blake に似る。

John Milton (1608-74) Blake が最も大きな影響を受けた先輩である。Blake の『ミルトン』において大団円をもたらす女性オロロンが、初めて川として登場する際(*Milton* 21 : 15--9)のイメージは、自然物の美的要素に取り巻かれている。彼女は、人間の自立の象徴にもなる『失樂園』のイヴに匹敵する詩的複合体である。この複合体を呼び出す制作態度は「芸術を政治学の中心に据え、詩人を共同体全体の要請に応える者とする」(Newlyn : 260)両者の態度である。またミルトンの時代から一八世紀にかけては、《自然》をそのままに写す蓋然性・信憑性(the probable)と、読者を惹きつける驚異性(the marvellous)のどちらを重視すべきかという詩論が盛んに行われた(Jackson : 1-35)。ジョンソン博士でさえミルトンの伝記を記しつつ、『リシダス』を、「それに内在する非信憑性(its inherent improbability)」(S. Johnson : , 163)のゆえに嫌った。だが全体としては一七四四年のポウプ没後、非蓋然性に対する考え方が変化したとされる(Jackson : 15-6)。そしてミルトンの信憑性を無視した擬人化の手法、例えば『失樂園』第二巻の《罪》と《死》の擬人化によって、当時《崇高》の一要素と考えられていた概念の曖昧化・神秘化は、世紀初頭からすでに注目を浴びて

いた。アディソンはこれを激賞し、同時に叙事詩にはこれは異物の闖入だとする「叙事詩の一部と考えない場合には...非常に完成された詩である」(*Spectator No.309; Addison. vol.2, 431*)。つまり明確に古典古代のジャンルであるべき叙事詩には無縁な、時代地域が別種な(foreign)要素の混入だとした(Knapp: 53-5)。古典古代神話の神々とは別種の、信憑性を欠く人物・事象の混入は許されないとしたのである。ブレイクはこの一八世紀の常識に反して、いかに無抑制にこの超自然的《崇高》に満ちた擬人化手法を採り入れたことか！ブレイクの予言書類の登場《人物》のほぼ全ては、人間であるとともに抽象概念であり、また歴史であり場所である。《彼ら彼女ら》は宇宙的・全時間的規模の《人物》であるから、当然《崇高》の伝統を大きく発展させる。『失楽園』第二巻とブレイクの予言書類を比較してみるだけで、いかに彼がミルトンを発想源として彼独自の叙事詩形態を作りあげたかが判る(その詳細については当日の添付紙片でご請求を！秋の半ばに贈呈します)。

Andrew Marvell(1621-78) Pastoral の伝統にひねりを加えて独自の世界を打ち出した。「庭」では先行ジャンルの書き換えという点で Blake と同じ努力を見せる。自然界の万物を自己の中に映しだし再創造する《精神》これを「想像力の働き」を意味するとし、《精神》が想像した世界は実体世界と同価値を持つとする。自然物すべてが一つの想像力に集約されるさまを描く作品として「庭」は Blake の Imagination 論の先駆と言えよう。また「アップルトン屋敷」では、途中尼僧院の取壊しに到る歴史を辿ったのち、詩は本題として、次の世代の庭園造営を描写する。庭園の描写に先立つプリテン島への呼びかけは何と Blake の *Jerusalem* に酷似することか！「ああお前、幸せに満ちていた大切なこの島嶼は / 《世界》の《楽園》だったのに、お前、当初は。(中略) / どんな悲運の林檎を味わったというのか、私どもを / 死に際に追いつめ、お前を荒地と化した林檎を？」(321-22; 327-28) これは「《内戦》によって荒廃した地上楽園」(Summers:189)への呼びかけである。この状況を救うべく「庭師が兵士にとって替わった」(337)とされる。全ての緑のものたちの養育所(nursery=苗床)が唯一の武器・弾薬庫となった(339-40)。「だが戦争はこの全てを覆す / 我らは大砲を植え、火薬を蒔く」(344) 庭師となった屋敷の主人は野心という雑草を抜き、良心を耕す(354)。「《良心》、これは天上界で育てられた草木、/ 地上の庭園に何よりも欠けているもの」(355-56)。庭園の周辺には草が拡がり、そこでは戦争という愚を犯した人間は、地を這うバツタにさえ見下げられる(371-76) 詩は戦争への悔いに満ちる。この点でもこれは、対仏戦争の経験を基にした Blake の *Milton* と *Jerusalem* に似ている。

Ambrose Philips(1674-1749) 1821年に彼の『牧歌』を学生用のテキストとして生物学者で詩人のソートン(Robert Jhon Thornton)が採用し、晩年の Blake がこれに挿絵を施したことでも彼は知られている。

セノット：いや本当に、これは悲しげに苦しんでいるコリネットだ。

よう、お前の曇りきった顔は、なんでまた溶けて涙になるのかのう、

おかしいじゃんか、今は空があんなにきらきらと輝いて見えるのに？(中略)

コリネット：ヒバリとヒワは楽しげだ、だが儂の嫌らしい運命はそうではござらん、

儂の地所では、ヒバリもヒワも歌いよらんと きてるのじゃ。(中略)

真夜中に目が覚めて、儂は哀しみのやり直しじゃ、

儂の涙は、朝露と混じりよるんじゃ、しょっちゅうのこっちゃ。(4-6; 11-12; 15-16)

この引用に対応する絵として Blake は、老セノットと青年コリネットが合い向かう四場面のほかに、三日月が沈む頃、嵐で葉も実も吹き飛ばす樹木、朝になって自分の樹(画面向かって左)だけが被害を受けて絶望の両手を挙げている牧夫、一つ飛んで近くの里程標・遠方の尖塔(近づきたい既成教会か?)とともに三角形をなす墓標 これらの全てに背を向けて立つ牧人からなる四面を描いている(同: - ;)。里程標は左右に手を広げた十字架のかたちをしていて、牧夫が教会を選ぶか自死を選ぶかというこの選択肢にも、その選択を迫る里程標にも背を向けざるを得ない状況を連続絵画で示すのである。セノットとコリネットの台詞と合わせて読むとき、さらにその詩情が大きく漂う、絵画としての傑作であろう。これを Blake に描かせたのは、ウェルギリウスの「第 エクローグ」が内に含む、農民の経済上の苦境をイギリスの牧歌に移し替えたフィリップスの功績であるとも言える。

Alexander Pope(1688-1744) Deism の詩人とも言われるのだから、Blake の正反対と見える(ところが Pope と Blake は多くの共通点を持つ)。ここでは正反対の面だけを見る。ポウプは、よく知られているように、文芸批評の判断基準の設定について

まず《自然》に従え(*First Follow Nature*)、そして《自然》の正しき諸標準によって

あなたの判断を形成せよ、この諸標準は常に不変(*the same*)だからである。

過つことのない《自然》は、常に神々しく輝き、

唯一、澄み切って、不変で、そして普遍の光であり、
全てのものに命と力、そして美を与えずにはいない、
《芸術》の源泉であるとともに、同時にその最終目標、試金石でもある。

《芸術》は《自然》という資源からそれぞれ正しき供給を蓄え
誇示することなく働き、見せびらかすことなく統括する。(Essay of Criticism, 68-76)

《自然》は全てのものに、それにふさわしい限度を設定し、
高慢な輩が自分のものだとして自稱する《機知》を、賢明にも制限した。(Essay of Criticism, 52-53)

《機知》を抑制するこの考え方については、王立美術アカデミー初代会長(Joshua Reynolds, 1723-92、やがて Blake の飽くなき批判の標的となる)が、画家たちに多数の規範を示して、良い絵画とはこの規範に従ったものとし、個人的趣味、珍奇な空想を特に排斥した。これと類似した考え方がこのポウプの法則論にすでに見られる。Reynolds が理性による趣味の涵養と、普遍的な、共有される文化基準を唱道したのに似て、Pope もまた上記のように判断力による《機知》の一般化を唱えたわけである。しかし一般化されず、個人の特徴を示すものとしての《機知》は、多くのロマン派詩人たちの導き手である《想像力》と名を変え、他方《判断力》はやがて Blake によって悪しき《理性》の名で呼ばれるものに似る。

James Thomson(1700-48) *The Seasons* の終結部、つまり『四季』成立の順序からして(改訂部分を除けば)最後に記された詩行にも、自然美への賞賛と自然科学への興味が共存する。トムソンは「谷間深くに隠棲した人」(同:1237)として、こう歌う 田園への隠棲だけで良しとする点が Blake と大きく違う。

諸国民の暴動、国々の衝突などは
世間から逃れている人物には動揺を与えない、彼は
静かな隠棲の地、花に囲まれた静謐のなかで
来る月も来る月も、来る日も来る日も、
展開してゆく一年のあいだじゅう《自然》の声に耳を傾け
《自然》のあらゆる姿を、賞賛しつつ眺めるからだ。(同:1302-08)

これによって想像力をとぎすまされた彼は、愛を初めとする人間の感情にも豊かに恵まれるとする(同:1334-51)。だが最後には、自然科学への飽くなき興味を語るのである。この点も Blake と正反対。

おお《自然》よ、全ての力を備えたものよ！ 全てに先駆けて
あなたの作品についての知識で、私を富ませてくれ。
私を天空へ連れて行け、そこに次々と生じる驚異と
果てしない青空一面に、惜しみなくちりばめられた
無限の範囲にまで広がる、世界の彼方の世界とを
私に見せてくれ。それら天体の動き、周期、法則、
これらを私に調べさせてくれ。(同:1352-58)

だが *The Seasons* の「冬」第二版に付した「序文」を読めば、Blake と共通性があることに驚く

「現代作家の大部分によって扱われているような詩歌への、現在の蔑視にはある程度の理由があるようには思えるけれども、だが詩という神的芸術に刃向かって誰かが本気で発言するなどということは、実に驚くべきことである。これは、最大に人の思考を高める力でもあり最大に人の感性を動かす力でもある想像力の、最大に魅力的な力に刃向かう発言である 一言で言えば、全ての学識と教養(politeness)の神髄そのものへの挑戦である。これは人類の普遍的趣向への侮辱であり、モーセからミルトンまでの、聞く耳を持った世界を魅了したものに刃向かう発言である。(中略)これら見る眼の弱い紳士諸兄は、詩歌の強烈な光や、詩歌が展開するより精妙でより愉快的な情景を直視できないのだ。

想像力の重視はロマン派主流に劣らない。Blake と同じく、天界から詩歌の靈感が下ることを祈願。

Works Cited or Consulted

Addison & Steele(ed. Gregory Smith). *The Spectator. In Four Volumes*. Everyman Library. Reset Version, 1963.

Beach, J. Warren. *The Concept of Nature in Nineteenth-Century English Poetry*. 1936; Russell & Russell, 1966.

- Bloom, Harold. *Blake's Apocalypse*. Anchor Books edition, (originally 1963) 1965.
- Damon, S. Foster. *A Blake Dictionary: The Ideas and Symbols of William Blake*. Brown U.P., 1965.
- De Luca, Vincent Arthur. *Words of Eternity: Blake and the Poetics of the Sublime*. Princeton U.P., 1991.
- Dyer, George. *The Complaints of the Poor People of England 1793*. (Revolution and Romanticism Facsimile Reprints chosen and introduced by Erdman, David V(ed.). *The Poetry and Prose of William Blake* Doubleday & Company, 1970.
- Jonathan Wordsworth) Woodstock Books, 1990.
- Friedenreich, Kenneth (ed.). *Tercentenary Essays in Honor of Andrew Marvell*. Archon Books, 1977.
- Frye, Northrop. *Fearful Symmetry: A Study of William Blake*. Princeton U.P., 1947.
- Glen, Heather. *Vision and Disenchantment: Blake's Songs and Wordsworth's Lyrical Ballads*. Cambridge, 1983.
- Hutchings, Kevin. *Imagining Nature : Blake's Environmental Poetics*. McGill-Queen's U.P., 2002.
- Ima-izumi, Yoko. (今泉容子) 『ブレイク：修正される女 詩と絵の複合芸術』 . 彩流社, 2001.
- Jackson, Wallace. *The Probable and the Marvelous. Blake, Wordsworth, and the Eighteenth -Century Critical Tradition* Georgia U.P., 1978.
- Johnson, Samuel. *The Works of the English Poets*(1810). Vol.2(in 21 vols). New York Greenwood, 1969.
- Knapp, Steven. *Personification and the Sublime : Milton to Coleridge* . Harvard U.P., 1985.
- Keynes, Geoffrey(ed.) *The Letters of William Blake*. London, Rupert Hart-Davis, 1968.
- Ogawa, You(小河 陽) 『新版総説新約聖書』 .日本キリスト教団出版局, 2003
- Otto, Peter. *Constructive Vision and Visionary Deconstruction*. Clarendon Press • Oxford, 1991.
- . *Blake's Critique of Transcendence*. Oxford U.P., 2000.
- Paley, Morton D. Notes to *William Blake: Jerusalem. The Emanation of the Giant Albion*. The William Blake Trust / The Tate Gallery, 1991.
- Patterson, Annabel. *Pastoral and Ideology: Virgil to Valéry*. California U. P., 1987.
- Stevenson, W.H.(ed.). *The Poems of William Blake*. Longman, 1971.
- Summers, Joseph H. 'Some Apocalyptic Strain in Marvell's Poetry', in Friedenreich, above.
- Suzuki, Masasi(鈴木雅之). 『幻想の詩学：ウィリアム・ブレイク研究』 あぼろん社, 1994.
- Umezu, Narumi(梅津濟美) 『ブレイク全著作』全二巻、名古屋大学出版会, 1989. Riede, David. *Swinburne: A Study of Romantic Mythmaking*. Virginia U.P., 1978.
- Weiskel, Thomas. *The Romantic Sublime*, 11&23-4. The Johns Hopkins U.P., 1976, The Johns Hopkins Paperback edition, 1986.
- Witke, Joanne. *William Blake's Epic: Imagination Unbound*. London & Sydney, Croom Helm, 1986.